

介護予防・日常生活支援総合事業の 充実に向けた検討会（第2回）	資料 2-4
令和5年5月31日	

厚労省「介護予防・日常生活支援総合事業の充実に向けた検討会」参考資料

日常生活支援や介護予防等に関する提言

CLC 池田昌弘（2023.5.17）

全国各地の大都市、地方都市、商工業地域、集合住宅団地・戸建て団地、農山漁村、中山間地、離島等を歩くなかで、地域のつながりの希薄化の一方で、地域住民のもつ「つながり・気かけ・支え合う」力を実感してきた。

とくに、中心部から最も遠い厳しい条件の地域ほど、地域の結束力は高く、「何かあっても、ここまでは役場も来てくれないから」と、高齢者も参加して、なんとかみんなで助け合って暮らしを維持している。なぜかを問うてみると、制度・サービスが整う何百年、それこそ千年も前から、苦労に苦労を重ねて助け合って暮らして来たという。以前に比べ人口も減り、関係も希薄化したので、今後いつまでできるか不安だけれど、気かけ、支え合っていたいという声を聞く。

都会にあっても、隣近所を気にかけている人は思いのほか、いるものだ。事件事故が起こるたびにマスコミで紹介されるご近所の人たちのなかに、「あの人（家）のことは最近ちょっと気になっていたのよ」というものが少なくない。こうした気になることを、たとえば民生委員や地域包括支援センターにつながっていたらと思うことがある。

自治会長や民生委員、通いの場のリーダー、協議体のメンバーなどからよく聞く話のなかに、「行政、包括、社協の人たちがニコニコして地域にやってきましたら気をつけろ！また何かやらされるぞ！」というものがある。その一方で、生活支援コーディネーターからの最も多い相談は、「住民の主体的な活動を、どうやらせたらいいですか」というもの。どこか、おかしいことになっているような気が、私はしている。

住民一人ひとりに丁寧な暮らしぶりを聞いてみると、それぞれに自己流だったりするけれど健康法があり、また困った時に助け合える仲間とのつながりもたいせつにしている。そういう話をお聞きし、それって凄いことですよとお伝えすると、「そうだろう！だから昔からやっているのよ」と返ってくる。住民との信頼関係を構築した先に、日常生活支援や介護予防の活動は生み出されるものなのに、相手の暮らしぶりも聞かずに、「こんなことがたいせつなんですよ」と、行政や専門職から言われてしまったら住民は、「そうなんですね。じゃあそれやってみますかね」としか言えません。それが悪いことばかりではないことは理解できるけれど、これをもって「住民主体」「住民主体」と言われてしまうと、どこか「やらされ感」が拭えないのも事実。

専門職も一住民としての目線で、自分のまちの、それぞれに歴史のある地域ごとに、丁寧に住民と関わり、暮らしぶりや思いを見聞きして、ふだんの暮らしのなかで行っている健康法や、ご近所や仲間とのつながりや気かけ、支え合う姿から、何ができていて、何を支援すればいいのかを見極める、そんなことがたいせつなのに、と思うことが増えてきた。

【コロナ禍の3年を経て、人口減少を実感し始めた最近気になる世の中の変化】

○ 「サロンを解散して、サロンを新たにつくる」という現象

全国各地で聞こえてくる現象のひとつ。一旦解散して、新たなサロンを始める、というもの。どういうことか。「お金も縛りも要らないので、自由にやらせて」ということのようにだが、皆忙しいという背景がある。しかし、サロンの意味や意義を認識しているから、主体的に継続するというのだ。多くは、日中は忙しいので、参加する仲間の都合の良い早朝とか食事の終わった夜とかに集まって、ウォーキングをしたりランチ会をファミレスで開いたり。このなかには、社会参加も身体活動も栄養も含まれます。これらをサロンと認めれば、わざわざ集めなくてもいいのに、と思う。

○ 「認定されたサロンがない地域でも、サロンのような場はあるのよね」という声

これもまた、全国各地で聞く話。働きかけてもサロンが創出されない地域があるという相談を受けて、その地域の状況を聞いてみると、「公園に集ってラジオ体操やグランドゴルフを楽しんでいるグループがある」「自宅の園庭を開放して、仲良しグループで健康づくりをしている人たちがいる」「市営住宅のベンチやスーパーマーケットのフードコート、喫茶店に集って、毎日のようにおしゃべりに興じる仲良しグループがある」という。サロンのような場はこんなにもたくさんあるんじゃないか、と思う。

市内に何百店もの喫茶店があるというまちで聞いた話。この地の住民は、毎日のように喫茶店に集い、おしゃべりで情報交換、食事で栄養摂取、車を運転できる人に相乗りしてついでに買いもの、ちょっと困ったことがあれば支え合う、という。住民が毎日通うことで喫茶店の常設を支え、喫茶店のスタッフと客同士が、お互いを気にかけて見守っている。まさに喫茶店はサロンそのものなのだが、そういうなかでも「サロンをつくりましょう」という働きかけは、喫茶店や自主サロンの営業妨害・活動妨害となっていやしないか。

地域の生活文化を壊さないように、まずは住民の暮らしぶりとその意味や価値を知ることから始めたい。

○ 「大好きな畑仕事やグランドゴルフは、サロンやデイサービス機能と同等」という視点

本人は「大好きな畑仕事を続けたい」「三度の飯よりも大好きなグランドゴルフに行きたい」という思いがあっても、家族はそこで何かあったら心配、誰かに迷惑がかかったら申し訳ないという思いから、サービスに結びつけがち。そうしたなか、地域包括支援センターやケアマネジャー、生活支援コーディネーター等が、家族や周りの関係する人たちと話し合い、畑仕事やグランドゴルフなどを継続できている人がいる。

畑仕事、グランドゴルフを楽しむ仲間が、見守り、手伝い、自宅と畑や公園の間の行き来を同伴してくれるなどして、これまでの暮らしを継続している人がいる。

家族や専門職・事業所の理解で、本人の望む暮らしを継続できるようにしたい。

○ 「〇〇をつくったので、自宅まで取りに来て！」という住民流の相談とその対応！

生活支援コーディネーターなどに、「てんぷらをつくったから」あるいは、「野菜を収穫したから、自宅まで取りに来て！」といった電話がしょっちゅうあるという。駆けつけてみると、「ところでさ、近所にこんな方がいるんだけど、あなたどう思う？」といった相談が、必ずと言っていいほどついてくるのだ、という。「役場や包括、社協の窓口にまでわざわざ行って相談するような内容ではないと思うんだけど、しかし気になる。だから、あなたにだったら相談できると思って」といった具合に相談される、という。

やはり住民にとって、相談機関の敷居が高いのだ。なかなか気軽にはいかない。しかし、こうしたご近所のちょっとした気になることを、周りが気づくことで、おおごとを生み出さないセーフティネットになるはず。

地域に出かけることを制限されている生活支援コーディネーター等では、こうした住民との関係を構築できないので、そもそもこんな関係も生まれない。

効率のいい人間関係のつくり方も地域づくりもないことを、肝に銘じたい。

○ 5年10年15年先、サロンは「公民館」から「職場」へ変わる!?

人口減少のなかでも、生産年齢人口の減少が顕著になってきたという肌感覚が、全国を歩いていると実感することが増えた。その意味で、生産年齢人口の減少の高い地域ほど、労働者としての高齢者への期待は高い。猫の手も借りたいという事業者が、未経験であっても高齢者に働いてほしい、そうでないと地域の産業さえ守れない、という。

農山漁村の高齢者たちは、以前から夏場は忙しいので、あまり会議や行事を入れなくて話していたが、それがより顕著となっている。

地域差があると思うが、5年10年15年後、いずれサロン等の通いの場は、公民館ではなく、職場となるのではないか。職場に通うことが運動になり、打ち合わせや会議、そして職員同士のランチや仕事上がりの一杯はサロン、ここでできた仲間との気かけやちょっとした支え合いも生まれる。出勤日に職場に現れなければ、安否確認もしてくれ、翌朝9時に出勤するとなれば深酒もできない。小金を稼げることで、年金を補うこともできる。こうして、通いの場が公民館から職場に代わることで、支え合いのネットワークが強化される人も出てくるのではないか。

さらには、通いの場や生活支援サービスの創出にばかり目を向けていても、生産年齢人口の減少により、担い手の確保はより困難を極めることになる。速やかに、「つながり・気かけ・支え合い」を意識した地域づくりに着手しないと、孤独・孤立の予防も進まず、支え合いの基盤も築けない。

○ 若者が高齢者になったときに支え合える社会を今から築くことが孤立・孤独を防ぐ

介護保険における事業なので、主たる対象は高齢者であることは理解できる。しかし、つながりをうまく築けない若者は多く、子どもの頃からその体験を積み重ねることが、重要になっている。車や電気、電話などのほか、制度・サービスが十分ではなかった時代から、困ったときには支え合って生ききるための工夫や知恵、技・術を、それぞれの地域の風土に合わせて受け継いできた。そうした高齢者の経験知を、若者に受け継ぐ、循環型の地域づくりが求められている。

私たちは、なかなか「助けて」と言えないが、その前提には、「他人に迷惑をかけてはいけない」と躰けられてきたという背景もある。他人に迷惑をかけるくらいなら、死んだほうがましだと言う方さえいる。支え合いとは、適度な迷惑のかけ合いで、支える人と支えられる人とがいて成り立つが、支えられることが苦手では致命的である。

若いうちから「助けて」と言える、そして、助けてと言われたら、活躍できる訓練が今求められている。

子育てママが勉強会に集中したいので、赤ちゃんの応援隊「ベビチアさん」を募集したまちがある。募集を見て仲間呼びかけ参加した80歳代の女性たちは、頼られてうれしかったと言う。そしてママたちからは、ハツラツとしたばあちゃんたちを見て、他人に迷惑をかけることは悪いことではないんですね、と言う声が聞こえてきた。

頼られることが頼られた人の「活躍支援」となる、ということに気づいた瞬間でもある。

○ 「つながり・気かけ・支え合う地域の実現」は、1事業だけで実現することは難しい

「つながり・気かけ・支え合う」地域の実現は、ひとつひとつの事業や一人ひとりの専門職だけでは、成立しない。たとえば、つながり・気かけ・支え合う地域の絵があるとすると、その絵はジグソーパズルのように、何十、何百、何千もの多様な事業、多様な人（ピース）によって成立している。だから、生活支援コーディネーターがそれを実現しようとしても、生活支援体制整備事業という1ピース（制度）だけでは難しいのだが、それ以外との協働がうまく進んでいない。

なにより地域とか暮らしとかは、元々複雑に成り立っているので、制度を狭く捉えての運用では、なかなかうまくは進まない。

生活支援体制整備事業は、サロンや生活支援サービスの創出のみを行うものではなく、「つながり・気かけ・支え合う」地域づくりのための『体制整備（基盤）』であることを再確認、再認識することが喫緊の課題となっている。

まずは、自分のまちの住民を信じ、住民の暮らしのなかにある「つながり・気かけ・支え合い」から学ぶところから始まる。

コロナ禍で
考える

「孤立させない」 地域づくり

第4号

つながりが地域を元気に！
～気にかけて合いが広がる優しいまち～



喫茶よつばにて、笑顔でお出迎え

読み解きポイント

- 地域の課題をプロジェクト方式で考える
- こぼれ話から思いをくみ取る
- 課題を楽しみに変えて地域に広げる

もくじ

地域の概況	2
地域をみんなで考える コミュニティ組織の立ち上げ	2
コミュニティを彩る さまざまな活動	4
自分たちで決めて、楽しみ、 つながりを続ける	9
年表	10
事務局からのお知らせ	11

地域の概況

豊岡市は兵庫県北東部に位置し、2005年4月、1市5町（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町）が合併してできたまちです。

市域の約8割を森林が占め、北は日本海、東は京都府に接し、中央部には円山川が流れています。山陰海岸国立公園、氷ノ山後山那岐山国定公園をはじめとした自然環境にも恵まれ、2005年9月には、国指定の特別天然記念物・コウノトリが自然放鳥され、

人里で野生復帰を目指す取り組みが始まっています。

農林水産業、観光業などが盛んで、城崎温泉、神鍋スキー場、出石城下町などを有しています。地場産業としては、かばんや出石焼などの生産が行われています。

豊岡市西部の旧竹野町のなかでも、竹野南地区は山間部に位置します。JR豊岡駅より車で20分ほど走ると、竹野南地区の中心部に到着します。そこから谷に沿って、逆さYの字のような形で谷があり、それに沿って集落が広がっています。中心部から端の集落までは約8km。地区内

豊岡市(2021年11月9日現在)

人口 79,057人
世帯数 33,563世帯
65歳以上人口 26,874人
高齢化率 34.0%

竹野南地区(2021年11月9日現在)

人口 909人
世帯数 399世帯
65歳以上人口 427人
高齢化率 47.0%

では約8km。地区内には市運営のコミュニティバス「イナカー」が走り、通学や通院の足を支えています。地区には県の天然記念物・郷土記念物に指定されている桑野本の大イチョウなどがあります。

地域をみんなで考える「ミニコミュニティ組織の立ち上げ

自分たちの手でできることを

竹野南地区でボランティア活動をする「よつばの会」代表の富森とも子さんは、少子高齢化、過疎化が進む竹野南地区を『困った』と言いつけるのではなく、何かできることがあるのではないかと。自分たちの手で行うことができることを考えて、「20年ほど前から市社会福祉協議会の職員を交えて話し合いを続けてきました。当時、給食や読み聞かせ活動を行っていた富森さんたちボランティア仲間の間では、「道端での立ち話もたいせつだが、いろいろな人が出会え、顔を合わせて楽しく過ごせ



NPO法人わいわいみ・な・み副会長／よつばの会代表 富森とも子さん

る場がほしい」という目標ができ、2007年からふれあい・いきいきサロンを、2008年からは市社協からの補助金を活用して集落に出張してサロン活動を開始、同時にボランティアグループよつばの会が誕生しました。当初から、「竹野南地区全体での活動を考えていた」と富森さんは話します。南北に8kmの距離があり、高低差もあることから、しだいにそれぞれの集落で自主的にサロンが開催されるようになっていきましたが、同時に、人口の少ない集落では自分たちで開催することが難しいこともわかってきました。そこで富森さんたちよつばの会のメンバーがその地区に行き、サロンを開催する「出張サロン」も開催するようになりました。第1回目の出張サロンは、3世帯が暮らす山の上の集落でした。すぐ近くの集落までは山をくだり、20分ほど歩かなければなりません。富森さんたちが出張サロンの提案をする

と、何年も使っていなかった集会所

を住民が掃除をしたりして出迎えてくれました。ふもとの集落の人を中心にサロンのお手伝いをしてもらうことで、お互いに気にかけて合うきっかけづくりにもなりました。「出張サロンに行ったらとても喜んでくれてね。『四つん這いになってもこうしたサロンを続けていこうね』と言ってくれる人もいるんですよ」と富森さんは話します。

コミュニティ組織の誕生

よつばの会を中心とした住民による手づくりの活動は、少しずつ地域の気運を高めていきます。そうした基盤があるところに、2014年、豊岡市から地域コミュニティの推進という方針が打ち出されます。当時、竹野南地区の区長会長をしていた岡田隆男さんは、「いままでは区長会が中心となって地域の活動をしてきましたが、区長は1年の任期制のため、勉強会や視察などで1年が終わってしまいます。これでは地域の課題解決には至らない、という市長からの号令でもありました」と振り返ります。

竹野南地区にはコミュニティ組織がなかったため、2015年からコ

ミュニティをどんな組織にしていこうかという検討会が始まり、竹野南地区は3年間のモデル地区に指定されました。地区の公民館をコミュニティセンターに建て替えることも打ち出されていたため、富森さんをはじめとした竹野南地区の女性を中心に、「どんなコミュニティセンターにしたいか」が話し合われました。岡田さんは、「我々には、ここでどんな活動をしたか、というプランが先にあったのです。そのためにどんな機能がほしいか。それは実際、ここを中心として使う人の意見が反映されること

が一番。たとえば、配食をしたい、という思いがあるなかで、雪の日でも荷運びがしやすいように調理室の前に車が止められるようにしたり、高齢者の居場所をつくりたい、という思いを受けて、高齢者が汚してしまつたときにすぐに洗えるようにシャワー室を設置したり。だから、この建物（コミュニティセンター）は、会議室ベースではないんですよ」と話します。そうして、2017年4月に「竹野南地区コミュニティわいわいみな・み」が誕生しました。「わいわいみ・な・み」には、区長だけでなく、

学校、消防団、商工会、公民館登録グループなどが参加し、「竹野南のありとあらゆるグループと人が『わいわいみ・な・み』の登録メンバー」と岡田さん。「自分たちだけでなく、みんなが活動する、ということが大事。それができるのが竹野南地区の強み」と話します。

コミュニティの活動はプロジェクト方式で

竹野南地区コミュニティの特徴は、縦割り組織ではなく、プロジェクト方式という点にあります。組織ではなく必要な活動に予算を使うために、ワークショップを重ね、地域に必要なことを住民みずからが考え合います。そして、1年ごとの重点項目を決め、「チームみなみ」と呼ばれる5〜10人の実行委員会形式のプロジェクトチームを立ち上げます。このプロジェクトで通所サロンや営農組合なども立ち上がっています。

メンバーは、その事業に必要と思われる人で構成するため、必ずしも「地区の顔役」が入るわけではありません。たとえば、コミュニティセンターのステージに緞帳どんちやうがないこ

とから、「みんなで作ろう！」とプロジェクトチームが立ち上がりました。この中心となったのは、裁縫が得意な地区の女性たちです。古い浴衣をほどこいて緞帳づくりが始まりました。女性たちのなかには、通所サロン（詳細7p）の利用者や、桑野本地区の女性たちもいました。桑野本地区の女性たちは、毎週水曜日に集まり、おにぎりなどお昼ご飯を持ち込み、お漬けもの自慢をしながらおしゃべりを楽しんでいましたが、「若い者ができないことは私らがしたらええんだがな」と自分たちのつどう時間を地域のボランティア活動に充てていたのです。



ほどいた浴衣を並べて緞帳の柄を決める

プロジェクト方式で進める地域づくり



「コミュニティを彩る」さまざまな活動

出会い、楽しみ、つづきやき拾う喫茶よつば

2018年度からは、竹野南地区を旧4小学校区程度に分け、それぞれの地域で防災リーダーを育成、各地区での防災体制の構築に力を入れています。その背景には、高齢者の増加だけでなく、竹野南地区を走る道路が、土砂崩れなどで分断されてしまうと、中心部にあるコミュニティセンターから支援を届けられない可能性を考えたからです。行政からの支援を待つだけではなく、そして中心部のコミュニティセンターに集まれないまま、各地区で災害に対応ができるように、地区ごとのマニュアルづくりに取り組み、同時にそれに対応できる人材を育てているのです。

竹野南地区は、コミュニティセンターのある森本地区を中心に、「逆さのY字」のような形で谷に沿って道路が走り、そこに集落が点在しています。それぞれの道を「イナカー」と呼ばれる市バスが走り、豊岡市の中心部に行くには、自家用車でなければ、イナカーで森本まで来て、そこからさらに一般路線バス（全但バス）を乗り継ぎます。イナカーは走っているけれど、乗

り換えのために1時間ほどバスを待たなければならぬこともあります。コミュニティセンター近くの診療所に来て、帰りのバスを長時間待たなければならぬこともあります。雨の日、晴天で気温の高い日、重い荷物のある日は、その待ち時間がことのほか長く感じる……。そこで目をつけたのが、診療所やイナカーのバス停からほど近く、旧JAの支店に隣接する空き店舗。ここを改装して喫茶スペースをつくり、バス待ちの間に利用してもらおうと考えたのです。



喫茶よつばの手づくりケーキ

2016年から毎週木曜日、ここで喫茶を運営するのは「よつばの会」のメンバー。手づくりのケーキとお茶を200円でいただくことができます。バス待ちの間だけでなく、高齢になり、移動が難しくなった友人同士がこの喫茶で会い、おしゃべりを楽しんだり、ほかの地域から遊びに来たお友だちを連れて来たり。小さい子どもを連れてお母さんが来ると、場もいつそうにぎわいます。民生委員や駐在所の警察官なども、「ここに来ればいろいろな人に会える、いろいろな情報がわかる」と顔を見せまします。毎回40食を用意するケーキは、足りないときもあるというほど

喫茶よつばの日常



の盛況ぶりです。

喫茶よつばは、待ち合わせやおしゃべりの場という以上に重要な役割を持っています。それは、来ている人たちのつばやきを拾うこと。「いつも来る〇〇さんが来ていない」というと、誰かが「最近腰を痛めていて今日は来られないよ」と教えてくれます。そうした情報を聞くと、さりげなくその人の様子を気にかけて、ときには電話や訪問をして状況を聞きます。体調不良が深刻であれば、本人の同意を得て診療所の医師とも情報を共有し、診察の際に気をつけてもらうように伝え、その後の様子を教えてもらったりします。

「顔見知りだから、さりげないこ

と、わざわざ話すことでもないよう

なこぼれ話から、生活上の悩みを聞くことがあります。そうしたことが、必要であればよつばの会のスタッフと共有して定期的に様子を见に行くようになったり、通所サロンなどに来ってもらうようになったり。私たちでは解決できないことは、地域包括支援センターなどにも連絡します」と富森さん。

家族介護に悩む住民が来たときは、介護経験のある住民がその人の話を聞くことがあります。愚痴や悩みを話す場があり、それを受け止めてくれる人がいる。それだけでまた「明日も頑張ろう」という気持ちになれる。一見するとおしゃべりの場にす

ぎませんが、思いを吐き出し、受け

止めてくれる人がいるという心の健康を支える場にもなっているのです。竹野南地区コミュニティセンターの地域マネジャー（集落支援員）の鶴原広美さんは、「よつばの会のスタッフの皆さんは、ただ接客しているだけではないんです。カウンターの中心にいる時間はとても短くて、住民が来たらずばに行つて出迎え、同じテーブルに座つておしゃべりをしていきます。それが、喫茶よつばのすばらしいところなんです」と話します。

手押し車を押してくる姿が中から見えたらしつと扉を開け、「会えてうれし」と全身で喜びを表し、立ち話。わずか数メートル先の座席に座



喫茶よつばで情報交換

る間にもおしゃべりがはずみずみ。待ち合わせの人が来るまではそこで一緒におしゃべり。大きく相槌を打つたり、笑ったりしながらも、ちょっとしたこぼれ話から気になることをしっかりと拾っています。

「スタッフはみんな、お節介というか、人のことを気にかけているんですよ。そして住民の皆さんもそれがよくわかっている。気になることも、ここでお茶を飲みながらしゃべること、きちんと受け止めてくれるし、私たちが受け止めきれないことはどこかにちゃんとつないでくれる。そういう思いがあるので、安心

してしゃべってくれます。喫茶よつばは、そういう役割のある場なのだと思います」と富森さん。「一緒にお茶を飲んでいただけでいろいろ話が出てくるんです。そうした話を、聞いているほうは流すのではなくて、取捨選択してつなげていく。よつばの会のメンバーには、民生委員や福祉委員、看護師やホームヘルパーがたくさんいます。なにげない会話からその人の思いを引き出したり、気になることをつなげるノウハウを持つていることも、心強いですね」と話します。

生きがいと買ひもの ニーズのマッチング

喫茶よつばの横のガレージで、喫茶と同日の毎週木曜日に開催されるのが、竹野南地区コミュニティわいわい・な・みが主催する「わいわい・な・み市場」です。朝10時の開店を前に、地域住民が列をなします。竹野南地区では買ひものをする場所がなく、一方で、高齢になっても畑を続けている住民が多くいます。畑を続けている住民の多くは、自分たちで食べる以上の野菜をつくって

わいわい・な・み市場



いるため、その野菜の販売をおしして買ひものと生きがいの双方を支援する取り組みとして、2017年にスタートしました。

木曜日の朝、出品者は各家で袋詰めをした野菜を持って次々に集まってきます。ここで1枚1円のラベルを買い、商品に貼っていきます。

鶴原さんは「つくる人の楽しみと、買ひに来る人の楽しみを大事にしているのが、品ぞろえが少ない日もあるれば多いときもあります。生産者の人にとっては、苗代にもならない程度の価格かもしれませんが、『ここに出すから収穫に行かなきゃ』来年はこんな商品をつくって売ってみたい』など、生産する高齢者の皆さんの楽

しみになっていて、それがいい、と思つて取り組んでいます」と話します。売り上げの1割は「わいわい・な・み」の事務手数料となりますが、市場の開催中はわいわい・な・みの職員がレジを担当するなど、当日の運営を担っています。

あの人の野菜はおいしい、どんな調理法で食べようか、という会話が聞こえてきます。ひととき評判がいいのは、87歳の立花文子さんのつくる野菜です。立花さんは、売るための秘訣を「土づくりからこだわること」「ほかの人の畑で匂を迎える少し前に出すこと」「ちよつと珍しい品種を仕入れること」と話します。普段は通所サロンに通い、近所の人が立

花さんのかわりに出荷をしますが、「これから明日のお店に出すために収穫しないと」と意気込み、「サトイモは皮をむいて洗って出せばそのま



生産者が野菜を搬入。ラベルを貼って販売準備



新鮮な野菜にあれこれ目移り

「まずぐに使えるからね」と工夫をこらして袋詰めをしています。「ちよつとの工夫が売れるコツなのよ」と笑って話す立花さん。その言葉に自信がみなぎります。

介護予防の場をつくらう！

出前サロンや喫茶よつばと活動を広げてきたよつばの会のメンバーは、「地域には、もう一歩進んだことが必要(富森さん)と感していました。おりしも、生活支援サポーター養成講座を受講していたメンバーたち。豊岡市支え合いサービス事業を受託し、コミュニティセンターに日帰り



楽しいゲームで顔がほころぶ

で過ごせる介護予防の場をつくらう、と思ひ至りました。豊岡市から介護予防・日常生活支援総合事業の通所型サービスAの指定を受け、2017年11月、「ささえ愛通所サロンわいわいみ・な・み」が誕生しました。ささえ愛通所サロンは、月4回、水曜日、10時から始まります。午前中は季節に応じた手づくり品の製作、午後は歌をうたったり、軽い体操をしたり、ゲームも盛り上がります。それでも一番生き生きとするのは、やはりおしゃべりの時間。伺った日は、2月にみんなで仕込んだ味噌の出来ばえを確認しました。竹野南地区には、昔から味噌づくりで評判の



思い出を話す味噌づくりの立花文子さん(左)

集落がありました。住民の高齢化でその味噌づくりが途絶えていました。そこで、その集落の住民に教えてもらってサロンでも味噌づくりをしたのです。

見られます。

立花さんも、「昔は味噌をつくらう」と話します。「味噌と梅干は、とても大事なものです。だから開ける日も、いい日を選ぶのよ。それだけ大事なものであったの」「この味噌はいい麴でつくったから大丈夫。まんべんなく混ぜたらいい」「塩と唐辛子がカビ予防になる」など、経験からさまざまな知恵を話してくれました。

ささえ愛通所サロンには、竹野南地区全域から利用が可能なため、送迎を行っています。その送迎車の止まる場所での待ち時間からおしゃべりに花が咲き、いわば「サロンの0次会」が始まっています。もちろん、帰りの送迎車は「サロンの二次会」。今日あったこと、車窓から見える竹野南の景色など、おしゃべりは止まりません。

富森さんは、「ささえ愛通所サロン

ほかに、「畑仕事をしている、毎日1万歩を歩く」「畑に行く途中にお友だちの家があつて、おしゃべりをしてい



送迎の車内もミニサロン

に来ていた人は、支援の受け手なのかもしれないけれど、みんな担い手でもあるのです」と断言します。リウマチで手が不自由な人には「知恵と知識を出して」とアドバイスを求めたり、地域行事の手伝いをしてもらったり。「できる範囲でいいから来てほしい、と声をかけて、一緒にこれをやろう、と声をかけています。笑う機会をたくさんつくるのが大事ですからね」と話します。

暮らしの場に向く生活支援

「介護を受けるほどではないが、家事を少し手伝ってほしい」「食事づくりがしにくくなってきたし、栄養の偏りが心配なので配食サービスをお願いしたい」「必要な買い物をしてくれると助かる」「一人暮らしで安否確認をしてほしい」などの声を受け、2020年7月、豊岡市からの委託事業として「ささえ愛生活支援サービス」が始まりました。

そのうちの1つ、配食サービスは、社協事業とよつばの会のボランティアによって、あわせて週3回実施されています。毎回30食ほどを3人ほ

配達とともに見守りも



どのボランティアがつくりまします。「ブロッコリーは柔らかかめにゆでたほうがいいかな?」「盛りつけはこうしたほうがきれいね」などと話しながら、栄養バランスや彩りに配慮されたお弁当が次々とつくられていきます。

配食を始めるにあたり、活躍したのはやはり地域の高齢女性たちでした。「このお宅に届けたいけれど道がよくわからない」と言う配達ボランティアとともに車に乗り、道案内をしてくれます。次の家に届けるまでその家でおしゃべりをして待ってもらい、また一緒に帰っていきま

す。配達ボランティアがその家までの道のりがわかっただけでなく、高齢者同士、久しぶりのおしゃべりを

楽しむ姿がそこにありました。

訪問するスタッフも、竹野南地区の住民です。顔見知りも多いため、「お弁当を届けることだけでなくおしゃべりを楽しみに待っている人が多い(鶴原さん)と言います。訪問に同行すると、いつもいるはずの家が不在だったことに気づいたスタッフ。「畑にもいなかったし、今日はデイサービスの日ではないし……」。ふと、この日は月に2回の地域サロンの日であることを思い出します。「ちよつと行ってみよう」と地域サロンの会場に。そこで楽しそうにおしゃべりする姿にほつとしつつ、周囲の人からも話を聞くことも忘れません。



彩りに気配りしながら盛りつけ

「皆勤賞だ」

よ、常連さんだからね」と話す住民の声から、「この人は毎回ここに来ていいる」とわかるだけでなく、友人同士のおしゃべりにも耳を傾け、そこでの様子を気にかけて

こうした情報は、喫茶よつばでお茶を飲みながらスタッフや民生委員とも共有します。富森さんは、「個人情報という懸念があることもわかっています。『地域のこと』としてみんなで許せる範囲で共有するということを、みんなが承知しています。地域のことを地域のなかでみんなで解決していききたいという思いはみんなが持っていることです。情報を知らないのと動けないので、懸念を乗り越えていかないと、本当にみんなに寄り添っていくことはできないと思っっています」と話します。不安に寄り添い、絶妙なさじ加減でつないでいく配慮が地域にあふれているのです。



弁当を届け、体調を気遣う

自分たちで決めて、楽しみ、つながりを続ける

2019年、「竹野南地区コミュニティわいわいみ・な・み」はコミュニティ組織としてNPO法人化した。事業の広がりにつれて、さまざまな契約を団体としてできるようにするためです。理事長は岡田さんが、副理事長は富森さんが務めています。

「コミュニティを立ち上げるときに、『立派な事業計画書はつくらない』『きれいな組織はつくらない』という2点を決めたい」と岡田さん。「自分たちだけでなく、みんなで活



NPO 法人わいわいみ・な・み
理事長 岡田隆男さん

動する、ということが大事。立派なものだけでなく、自分たちで考えて、自分たちが決めたことを、自分たちがするんだ、ということが一番大事だと思っています」と話します。

そして富森さんは、活動の極意をこう話します。「楽しそうでしょ。楽しいことがないと、なんでもやっていけないんじゃないかな。しんどいことばかりでは、続きませんよ。その言葉を裏づけるように、竹野南地区ではどこに行っても笑い声が聞こえてくる温かさ、そして暮らしの不便はあっても暮らし続けられる知恵と工夫とつながりがあふれています。

鶴原さんは、「専門職だけでこの900人以上の住民全員を把握することはできないし、専門職一人ががんばっても、それは専門職の活動で、地域の活動ではありません。私が地域をまわっていても気づかない人や知らない人はいます。だから、専門職は自分だけでやってはいけません。自分の活動にはいけないんです。地域の皆さんと協力することで、住



竹野南地区コミュニティセンター
地域マネジャー 鶴原広美さん

民一人ひとりの思いや願いを広く拾っていくことができるようになります。地域で孤立したり、課題を抱えている人の情報は、雑談のなかからあがってきます。それを気づいた人が私たちに教えてくれるんです。住民の皆さんとつながっていくと、こぼれていくものが少なくなります。誰かがそれを拾って持ってきてくれることで、専門職としての仕事もできるんですよ」と話します。

地域を誇りに思い、そしてつながりのなかで不安に寄り添い、安心を生み出す、竹野南地区。この地区には、ぬくもりと優しさが満ちあふれています。

竹野南地区 年表

1987年4月	竹野南小学校設立（三原・椒・大森・森本の4校が統合）。のちの「よつばの会」は、竹野南小学校の校章（4つの学校なので四葉）にちなんで命名された
2001年	調理ボランティア活動を開始
2005年	給食活動、読み聞かせ活動をスタート
2005年4月	平成の大合併により、旧竹野町が豊岡市に合併
2006年	豊岡市乳幼児家庭教育委託事業「ヨチヨチランド」スタート（2009年よりよつばの会が関わり、2020年より『わいわいみ・な・み』の自主事業に）
2007年	給食調理や読み聞かせをしていたメンバーがふれあい・いきいきサロンを開始、「よつばの会」として活動開始
2008年	ボランティアグループ「よつばの会」誕生、補助金を活用した「出張サロン」を始めたり、森本保育園との交流事業に関わる
2008年10月	竹野町町営バスの路線を引き継ぎ、豊岡市のコミュニティバス「イナカー」運行開始
2012年4月	床瀬区サロン友の会 スタート。公民館の交流広場を利用して月1回、ふれあい喫茶を開く
2014年	豊岡市で地域コミュニティづくりの推進が始まる ふれあい喫茶を毎月第3木曜に設定
2015年	コミュニティ設立準備委員会 豊岡市の土曜チャレンジ学習事業として「子ども教室」スタート。スタート時よりよつばの会が関わり、その後、『わいわいみ・な・み』の自主活動に
2016年4月	「交流広場わいわいみ・な・み」開設。JA店舗跡地でボランティアグループ「よつばの会」による週1回の喫茶が始まる
2017年	中村区で地域活動支援センター「だんだん」の喫茶（月2回）始まる
2017年3月	竹野南地区コミュニティセンター開所
2017年4月	「竹野南地区コミュニティわいわいみ・な・み」誕生
2017年5月	豊岡市健康づくり地域自主活動支援事業「玄さん元気教室」開始。竹野南地区では、行政区ごとに11グループが活動中
2017年6月	交流広場にて「わいわいみ・な・み市場」スタート
2017年11月	豊岡市の委託を受け、「ささえ愛通所サロンわいわいみ・な・み」（介護予防・日常生活支援総合事業による通所型サービスA）開始
2018年1月	竹野南営農組合設立
2019年9月	「NPO法人わいわいみ・な・み」設立
2020年7月	豊岡市の委託を受け、「ささえ愛生活支援サービス」（介護予防・日常生活支援総合事業による訪問型サービスA）開始
2020年7月	三原地区でサロン「カフェ燦とびあ」スタート
2020年9月	防災ワークショップ 開始
2021年1月	エリアごとの「水害時避難マニュアル」作成
2022年3月	竹野南小学校、竹野小学校、中竹野小学校の統合により、竹野南小学校、中竹野小学校が閉校予定。以後、放課後児童クラブは竹野南地区コミュニティ内に設置予定。森本保育園が閉園予定

事務局からのお知らせ

オンライン講座のご案内

本誌で紹介した兵庫県豊岡市竹野南地区の取り組みを聞く講座をオンラインで開催します。
インタビュー動画も含めながら、竹野南地区の地域づくりを学び合います。

つながりが地域を元気に！ ～気かけ合いが広がる優しいまち～

日 時：2021年12月22日（水）11:00～12:00

開催方法：オンライン（Zoom）

参加費：無料

ゲスト：NPO法人わいわいみ・な・み 副理事長 富森とも子さん

竹野南地区コミュニティセンター 地域マネージャー 鶴原広美さん

お申し込み方法：ホームページよりお申し込みください。<https://www.tunagari-pj.net/case>

本情報誌のバックナンバーおよびオンライン講座のアーカイブはホームページからご覧いただけます。

アーカイブ版では、オンライン講座当日放送した参考映像がご覧いただけるサイトの紹介や、現地映像にさらに取材映像を追加した特別編を公開中です。

<https://www.tunagari-pj.net/case>

つながりPJ事業のご案内

<支援者交流・相談会>

地域共生社会の包括的な支援体制の構築に向けて、「断らない相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」等を進めるうえで、アドバイスを求める支援団体・自治体等を募集します。

対 象：包括的支援体制構築に取り組む支援団体・自治体

対 象 数：10団体程度（先着順）

受 付：ホームページで受付中 <https://www.tunagari-pj.net/advice>

支援形態：当プロジェクト運営委員等を中心としたメンバーが、オンライン（Zoom ミーティング）で、ともに考えたり、アドバイスをを行います。（1回 1～2時間。複数回になる場合もあり。相談内容は原則非公開です）

そ の 他：公開型の情報交換・相談会の企画もごさいます。企画・準備が整い次第、ホームページ上でお知らせいたします。

【主なアドバイザー（本プロジェクト運営委員）】

榎部 武俊	（一社）釧路社会的企業創造協議会（北海道）
森田 真希	（特非）地域の寄り合い所また明日（東京都小金井市）
塚本 秀一	（社福）湘南学園（滋賀県大津市）
池谷 啓介	（特非）暮らしづくりネットワーク北芝（大阪府箕面市）
山本 信也	（社福）宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）
風 保憲	（社福）淡路市社会福祉協議会（兵庫県）
上村加代子	（特非）にしはらたんぽぽハウス（熊本県西原村）
佐藤 寿一	（社福）元宝塚市社会福祉協議会
池田 昌弘	（特非）全国コミュニティライフサポートセンター（宮城県）

発行元：孤立させない地域づくりのためのつながり推進プロジェクト

<https://www.tunagari-pj.net/>

事務局：特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F

TEL:022-727-8730 FAX: 022-727-8737

URL: <https://www.clc-japan.com>

本情報誌は、厚生労働省 令和3年度新型コロナウイルス感染症セーフティネット強化交付金の助成を受けて作成しています。

コロナ禍で
考える

「孤立させない」 地域づくり

第6号

コロナ禍でもつながりをあきらめない
～ワクワクが広がる地域づくり～



泡瀬第三自治会の声かけ隊。花を持って訪問した日の1コマ

読み解きポイント

- **自分が率先して楽しみ、その楽しさを地域に広げていく**
- **顔を見て、声をかけ合う
関係づくりはコロナ禍でも顕在**
- **1人の楽しさがみんなの楽しさ
地域の楽しさに**

もくじ

地域の概況	2
「ワクワクの達人」 ～自治会長の思い～	2
泡瀬第三自治会の さまざまな活動	3
自治会長は 「地域のインフルエンサー」	10
沖縄市の考える これからの地域づくり	11
ワクワクをつなげ、 広げる地域づくり	12
事務局からのお知らせ	13

地域の概況

沖縄県は、九州から台湾に連なる南西諸島の南半分に位置し、東西約1000km、南北約400kmに及ぶ海域に、沖縄諸島、先島諸島、尖閣諸島、大東諸島の大小160の島々(うち有人島47)から成っています。41の市町村があり、200種類が確認されるサンゴをはじめとした豊かな自然や独自の琉球文化が発展する、豊かな観光資源も併せ持ちます。

15世紀に琉球王朝が興り、アジア

アや日本などの周辺諸国と交易を行い、海洋国家として発展を遂げてきた琉球。1609年の薩摩藩の武力侵攻により支配下に置かれましたが、1879年に沖縄県となりました。

第二次世界大戦では、日本で唯一の地上戦の激戦地となり、多くの犠牲者を出しただけでなく、1945年に日本が降伏したあとも沖縄はアメリカの軍政下に置かれ、1972年に本土復帰を果たしました。しかし、現在も日本全体の約75%の米軍専用施設があ

り、人々の生活と密接に関係しています。

沖縄本島の中央部に位置する沖縄市は、1974年にコザ市と美里村が合併して誕生した、那覇市に次ぐ沖縄第二の都市です。2007年に「エイサーのまち」宣言をし、エイサー文化の継承・発展ならびに青少年の健全育成など、地域活性化に取り組んでいます。

市域面積の約36%を米軍基地が占め、アメリカ、フィリピン、ベトナムをはじめとした約70か国にルーツを持つ人々が住んでいます。

泡瀬区は、沖縄市の東部地区のなかで、中城湾に面した地域にあります。泡瀬第三地区は、泡瀬5丁目と6丁目の地域で、平坦な地形が広がります。地区内の中央部を路線バスが走り、商店、工業高校、保育園や商店が立ち並び、徒歩圏内にはスーパーや飲食店も多くある地域です。

「ワクワクの達人」自治会長の思い

「ワクワクの達人がいる」……そう聞いて訪ねた、沖縄市泡瀬第三地区。沖縄市の東部、中城湾に面した泡瀬地区のうちの泡瀬5丁目と6丁目とそのエリアです。1950年の泡瀬通信施設の建設にともない、このエリア一体が埋立地となり、住民が流入しました。エリアのなかでも最後に開発が進んだ三区は、当初から約1150世帯に大きな変化はなく、現在は2433人が暮らします。

海岸に近い泡瀬第三地区は、他地区に比べて高齢化率も高い地域で、一人暮らしや日中独居、高齢者のみの世帯も多くあります。自治会加入率は50%程度と、市内でも加入率の

沖縄市 (2021年11月30日現在)

人口	143,077人
世帯数	65,167世帯
高齢者数	30,056人
高齢化率	21.0%
年少人口	24,307人
年少人口割合	17.0%
平均年齢	41.96歳

泡瀬第三地区 (2021年11月30日現在)

人口	2,433人
世帯数	1,136世帯
高齢者数	822人
高齢化率	33.8%
年少人口	274人
年少人口割合	11.3%
平均年齢	49.18歳



泡瀬第三自治会長 仲真紀子さん



泡瀬第三公民館外観

高い地域ではありませんが、加入者の多くは高齢者や高齢者のいる世帯です。防災の観点からも、「万一のときに連絡がとれるように」と自治会では気になる人に登録を呼びかけ、その家族の連絡先などを把握しています。

「空き家が出てもすぐ次の人が引越してくるから、世帯数に大きな変化はないねえ」と話すのは、前出の「ワクワクの達人」こと、泡瀬第三自治会長の仲真紀子さん。仲真さんは、公民館に常駐し、さまざまな地域活動を生み出したり、住民からの困りごとに対応しています。そ

の根底にあるのは、「楽しいことのでつながりたい」という強い思いです。

2019年4月に7代目の自治会長に就任する前は、16年ほど会計として自治会活動に携わってきた仲真さん。「楽しくなければ人は集まらない」という言葉どおり、公民館では連日、楽しい集まりが開催されています。健康体操、カラオケ、まーみな会、グラウンドゴルフ、ミニデインなどの活動に多くの住民が参加しています。

2021年の冬にはイルミネーションで公民館を飾ることを思い浮かべます。インターネットで飾りつけ用のイルミネーションを購入しようとする、通常配送では1週間という時間がかかることが判明。それではクリスマスには間に合わない！と、調べてみると、業者から大阪までは翌日配送、大阪から沖縄までは宅配便の利用で1〜2日で配送が可能だとわかりました。そこで、大阪の知人に頼み、いったん受け取ってもらって沖縄への配送の手配を依頼。配送にかかる時間を大幅に短縮でき、クリスマスまでの約1週間で、地域住民とともに公民館を見事に飾

りつけた……というエピソードも。「配送が間に合わない」とあきらめるのではなく、どうすればそれができるのか、どんなときでもその最善の方法を考えて走っている……それが泡瀬第三自治会です。

泡瀬第三自治会の さまざま活動

●まーみな会

沖縄のことばで、もやしを「まーみな」と言います。まーみな会とは、文字どおり「もやしの会」のこと。泡瀬第三公民館では、毎週木曜日の14時から、高齢者が集まってもやしのひげ取りをしています。4年ほど前に始まったまーみな会は、3人からのスタートでした。いまでは毎回、8〜10人程度が参加します。女性が多いですが、ときには妻を迎えに来た夫と一緒に参加し、妻よりも夢中になることも。デイサービスに通っている人も3人ほどが参加していて、ここでデイサービスの情報交換がされることもあると言います。

沖縄の食卓にのぼることの多いまーみなは、量り売りで大量購入し

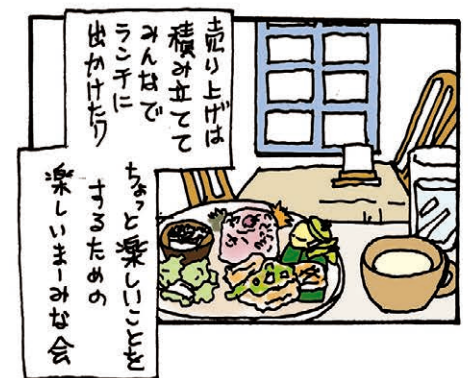
ます。「ひげをきれいに取れば長持ちするのよね」と話しながら、丁寧な仕事ぶり。ひげ取りをしたもやしは重さをはかり、再度袋詰めをして、希望者が購入します。以前は婦人会のLINEで購入を呼びかけていましたが、その評判が口コミで広がり、最近では事前の予約でほとんどが売れてしまいます。

まーみな会の売り上げは積み立てて、ちよつと遠いところにランチやモーニングに出かけます。わざわざ遠いお店を選ぶのは、参加者の多くが90歳前後で、その年代の高齢者だ



もやしのひげ取りに励む

まーみな会



けではなかなか行くことができないからだと言います。「仲がいい、元気なおばあちを家に閉じ込めたくない」と仲間さん。ランチついでにドライブも楽しみます。

14時から始まるまーみな会ですが、13時には参加者が続々と公民館に集まります。1時間ほどおしゃべりを楽しみ、まーみなのおしゃべり開始。2時間ほどひげ取りをしたら、16時過ぎにはお茶を飲みながらまたおしゃべりが始まります。

取材に伺った日には、初めてまーみな会に参加したという女性も。「昨日も今日も公民館に来て。みんなでおしゃべりもできるし、楽しいわ」と盛り上がります。

「まーみなを買いたい人も多いし、



ゆんたくの前に、片づけもみんなで

収益も上がるけれど、参加者が増えなくてもまーみなは増やさない」と仲間さん。それは、まーみな会をとおして、参加者同士のおしゃべりの時間が何よりもたいせつだと考えて

いるからです。

新型コロナウイルスの感染拡大で、ランチのお出かけはお休みしていますが、まーみな会は広い会場でそれぞれがマスクをし、換気をするなどの感染対策をしながら続けます。

参加者のなかには、緊急事態宣言から家にとじこもりがちになり、体力が低下して歩行にふらつきが見られるなどの症状が現れてしまった人もいます。感染拡大期には休止することもあるまーみな会ですが、再開したときには「10分でも20分でも、ゆんたくだけでもいいからおいでよ」と、仲間さんたちは声かけをしています。

あるとき、この女性と病院で出

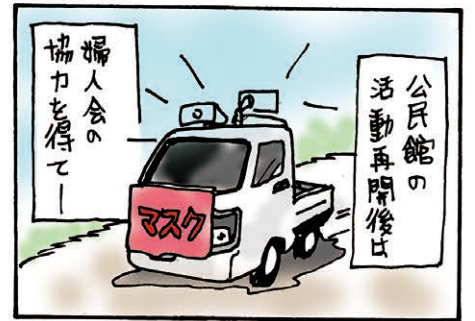
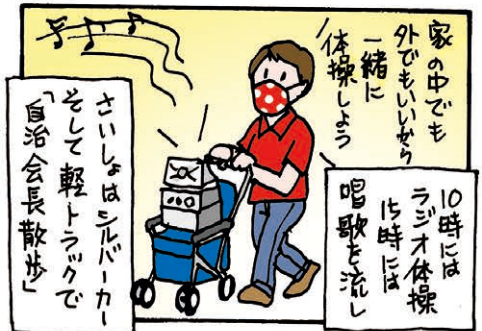
会ったという人は、この女性から「公民館に行きたいから元気になりたい」と言って通院し、リハビリに取り組んでいることを聞いたと言います。仲のいい友だちと出会い、おしゃべりを楽しみ、そして自分たちが取り組んだことが誰かに喜んでもらえる。そうした循環が、前向きな気持ちを生み出しているのは言うまでもありません。

● 声かけ隊

2020年3月。緊急事態宣言にともない、新型コロナウイルスの感染防止の観点から公民館は閉館となり、利用できない状況になりました。「実は、当初はこの状況がそんなに長く続くとは思っていなかった」と仲間さん。閉館中に、いまままで気になっていたけれど手をつけることができなかつた看板の修理などに取りかかります。「それもあつという間に終わっちゃってね。1週間が過ぎで、毎日のように顔を合わせていた皆さんがどうなってるか、気になってしまつて」と言います。

そこには、仲間さん自身のある経験がよみがえりました。元気だった

声かけ隊



母が閉じこもりがちになったときに、体力が落ち、食欲もなくなり、耳が聞こえにくくなるという身体症状があらわれたのです。散歩や公民館活動に誘い、人とのふれあいのなかから少しずつ元を取り戻したという母の姿が重なりました。「コロナで家に閉じこもり、人と会い、話す機会がなくなったら同じようなことが起こるのでは」と、仲真さんは危惧しました。再び会えるようになつたときに、体力が落ちて集まれなくなってしまうのは元も子もありません。

緊急事態宣言中に、集まれなくても体を動かし、顔を見て安心できるような何かができないか……。ひらめいたのは、区内スピーカーの活用でした。毎日10時と15時の1日2回、区内のスピーカーを利用して、朝はラジオ体操、午後は唱歌を流します。スピーカーの近所の家には、音で迷惑をかけるかもしれない、と事前に説明に向かいました。また、おたよりをつくって全世帯に配付し、ラジオ体操と唱歌の放送を周知しました。

10時になると、「家の中でも外でもいいから一緒に体操しよう」などとDJ風に仲真さんが元気よく呼びかけ、ラジオ体操が始まります。終わると、『自治会長散歩』に行きますよーと区内スピーカーから声かけ。シルバーカーに小さなスピーカーを載せて、スマートフォンから音楽を流しながら散歩します。特にひとり暮らしの高齢者などを気にかけて歩き、「15時には歌を流すから一緒に歌おうねー」などと声かけをします。15時の唱歌は、曜日ごとに曲を決めています。歌詞カードをつくり、地域の広報紙などを配付する協力員の力も借りて、各世帯に配付しています。「今日の歌はよかったですよ」などの感想も届いていると言います。



おそろいの赤いポロシャツとマスクが声かけ隊の目印

再開すると、公民館の仕事もあることから、仲真さんが地域の気になる人に声をかけ続けることが難しくなりました。泡瀬第三自治会は、婦人会の結束力が強かったこともあり、婦人会に「一緒に声をかけていかない？」と呼びかけます。「自分の班だけでいいから、ちよつと声をかけてくれない？」と言うと、12人ほどが賛同しました。おそろいの赤いポロシャツを作成し、2020年8月18日に「声かけ隊」を結成！ひとり暮らし高齢者や高齢者世帯などを中心に、声かけ隊による見守りや声かけが始まりました。その後、声かけ隊の人数は徐々に増え、現在は28人。

全20班ある泡瀬三区ですが、各班に1〜2人の声かけ隊がいることになり、それでもどうしても手が足りないとときには自治会の役員が声をかけます。

「ひとり暮らし世帯や高齢者世帯が多い地域だから、顔を見ておかないと不安なのよ。声をかけたら、何かあったときにも話してくれるから」と仲真さん。声かけ隊がスターとして、住民の「入院している」「電球が切れた」などの情報が、いままで以上に入ってくるようになりました。「引っ越しをするのだけど、植木は自分で運ばなければならなくて



声をかけ、気にかけてもらうお互い様の関係

●防災訓練

困っている」という声があがったときには市社協につなぎ、ボランティアを派遣してもらったことも。

住民も、声かけ隊の訪問をとっても楽しみにしています。声かけ隊の女性は、「声をかけに行っているお宅は昔からよく知っている方ばかりです。私の家族のこともよくご存じて、こちらのことも気にして言葉をかけてもらうことも多いんですよ。私もお会いしておしゃべりをするのが楽しみです」と話してくれました。

泡瀬第三自治会では、年1回の防



ウォークラリーのチェックポイントで
(写真提供：泡瀬第三自治会)



家族と、近所の人と、避難訓練ウォークラリー
(写真提供：泡瀬第三自治会)

災訓練を実施しています。津波を想定し、例年は避難訓練などをしていましたが、2021年は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、集合での避難訓練を中止。そのかわり、4日間のうちの都合のいい日に挑戦する防災訓練ウォークラリーを実施しました。ウォークラリーでは、オリエンテーリング形式で防災にまつわるクイズなどを答えるスポットを設け、避難ルートを歩く形式です。「いま、いる場所」「海抜」などを答え、避難ルートのゴールまでの所要時間をカウントします。

家族や友人など、少人数で参加

し、すべてのスポットをまわったら公民館で答え合わせし、参加賞のプレゼント。住民がそれぞれ防災について考え、そして外出の機会をつくり、公民館で言葉を交わしてそれぞれの体調を気にかけて合う。コロナ禍で生まれた新しい防災訓練のかたちです。

●夏休み子どもランチ

2021年夏。コロナ禍で仕事をがんばっている保護者を応援しようと、夏休み中の子どものためだけに、「夏休み子どもランチ」を計画しました。予算は寄付でまかなうべく、



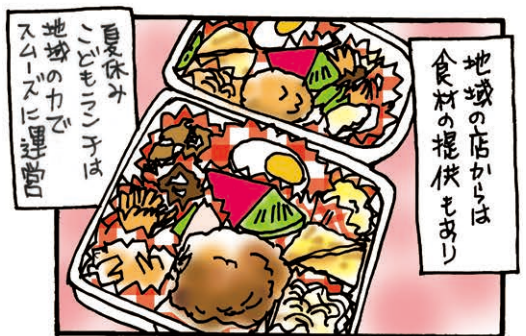
夏休み子どもランチで子どもたちの元気も確認
(写真提供：泡瀬第三自治会)

自治会だよりなどを使って地域に「こどもランチサポーター」として、資金や食材の提供を呼びかけました。緊急事態宣言の延長により、ランチは断念してお弁当のテイクアウトに切り替えましたが、約1か月の期間中（実施日は20日間）、一日平均50食のお弁当の提供をしました。

このお弁当は無料で、自治会員・非会員を問わず、泡瀬第三地区に住んでいる子どもならば利用が可能です。料理をつくるのは婦人会が中心となり、地元のお惣菜屋さんから食材の提供などもありました。

週4回の開催のうち、婦人会のメンバーが腕をふるうのは2日。それ以外の日は、公民館名物のカレーや

こどもランチ



地元の飲食店から提供された食材を使ったメニューです。それでも、婦人会のメンバーにとって毎週2回のお弁当づくりはたいへんだっただけは、と思いきや、ここにも泡瀬第三地区流の工夫がありました。婦人会のメンバーに、「あなたは何の料理

が得意？」と聞くと、ある人は「ゴーヤチャンプルー」、また別の人は「卵焼き」といろいろの答えが返ってきます。そこで、小分けのカップを渡して、「得意な料理を1品だけつけて、このカップに小分けして持ってきて」と頼んだのです。何品もの料

理をつくることはいへんでも、1品特化でしかも得意な料理ならば、とメンバーが腕を振ります。開けるメンバーが増えていくにしたがい、お弁当の品数もだんだん多くなり、豪華なお弁当に。終わるころにはメンバーから、「このくらいで本当によかったの？まだまだできるわよ」という声が聞こえるほど。負担感は少なく、それ以上に子どもたちの笑顔や「ありがとう」の言葉に、婦人会のメンバーのやりがいにもつながりました。

「予定よりも寄付金が多く集まったから」と、残金で公民館カレーの日にトンカツ用の豚肉を注文しようとする、「自分たちにも協力させてほしい」と無償提供されたと言



夏休みこどもランチにはたくさんの食材の寄贈も (写真提供：泡瀬第三自治会)



婦人会による夏休みこどもランチ。たくさんのおかずが届きます (写真提供：泡瀬第三自治会)

ます。地域の気かけ合いの思いが広がっている温かなエピソードです。

●地域イベントも開催

泡瀬第三自治会で毎年開催する夏祭りは、地域外からも来客があるなど約800人が集まる大賑わいのものでした。ですが、新型コロナウイルスの流行により、そうしたイベントの開催も難しくなりました。

2020年は、「自粛が続く、子どもたちも活動が制限されている。何かできないか」と考え、中止にするのではなく、工夫をして開催する方法を選択しました。時期を「感染者が少ない今の時期に」と7月中旬



お付き合いを始めたばかりのカップルが七夕に願いを込めて…12月には結婚の報告が
(写真提供：泡瀬第三自治会)



七夕に願いを込めて
(写真提供：泡瀬第三自治会)

の土曜日に設定。幅広く参加を募るのではなく、自治会会員、第三支部会員などを対象とした会員祭りとして、事前申し込み制にして来場者を把握しました。これは、大人数での混雑を避けることに加え、万一、罹患者が出た場合にも連絡をスムーズにとるための方策です。さらに、例年は会場で飲食ができましたが、持ち帰りの弁当を渡して会場での飲食は行わない、基本は屋外でのイベントとして、隣のテントとの間隔を十分にとる、フラダンスなどの発表は室内で行うが、観客は外のテントから見る、などの工夫がなされました。

2021年を迎える新年会も、感染拡大時期と重なり中止…:と思

きや、「ペーパー新年会」を開催。ペーパー新年会は、自治会だよりにプログラムとQRコードを掲載し、各自が好きなときにその動画を視聴するというものです。地域住民などが歌や踊りを動画で披露し、各家庭で楽しんでもらいました。また、住民が初詣に出かける泡瀬ビジュアル(神社。石神を信仰の対象とする)も年末年始期間が閉鎖されたため、「パーチャル初詣」としてビジュアルを参拝する動画も作成。会えなくても楽しさを共有するアイデアがあふれ出てきます。

2021年4月には、子ども会が中心となって、地域の川に手づくりのこいのぼりを飾りました。子ども



鯉のぼりを見学に来る保育園児たち
(写真提供：泡瀬第三自治会)

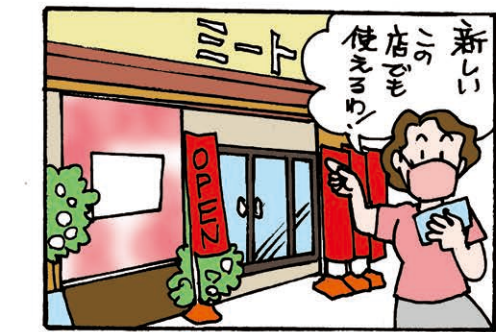
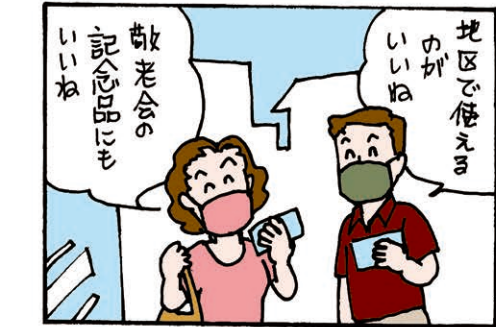
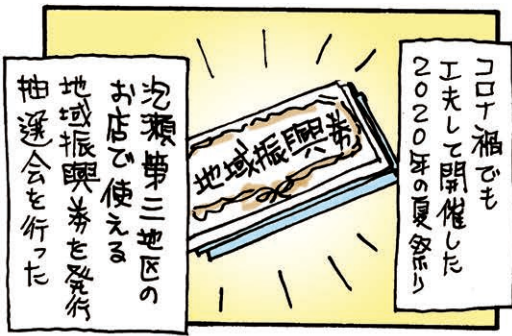


秋のお楽しみ会～ミュージックライブの様子
(写真提供：泡瀬第三自治会)

たちも一緒に飾りつけを行い、コロナ禍の地域に明るい話題が広がります。さらに、7月には七夕の短冊を川に飾りました。新型コロナウイルスが猛威をふるう時期でも、屋外で楽しめるイベントを企画しながら、絆を深めています。

住民の多くがワクチン接種を終えた11月には、感染の縮小期とも重なり、秋のお楽しみ会「ミュージックライブ」を開催。来場者にはマスクとフェイスガードの着用を呼びかけ、感染対策にも配慮をしつつ、音楽ステージや獅子舞ならぬ「牛舞い」などの出しもので、住民がつどい、楽しむ時間となりました。「やっぱり、人と会い、顔を見て笑い合うこ

地域振興券



とが一番。それで元気ももらえるし、安心にもつながる」と仲間さんは話します。

●**地域振興券**

2020年夏の会員祭り。それまでの夏祭りでは、市外の大型店舗で購入した景品を抽選会で渡していましたが、「コロナ禍で困っているのは地域のお店も同じ。地域のお店を買いもので応援できれば」と、地域振興券を作成しました。地域のお店に協力を呼びかけると、飲食店、理髪店、雑貨店など11店（現在は12店）が快諾。空くじなしの抽選会で地域振興券を渡すと、来場者にもとても好評でした。



地区に開店したばかりのお店でも使えることもあり、住民がその店舗を訪れるきっかけにもなりました。

コロナ禍で、敬老行事も中止となりましたが、その際にも地域振興券を製作。声かけ隊がお弁当と地域振興券を持って80歳以上の高齢者宅を訪問しました。その後も、秋のお楽しみ会「ミュージックライブ」の抽選会でも発行しています。



敬老会のイベントは中止でも、地域振興券を配布。来館の折りにも振興券のお礼を (写真提供：泡瀬第三自治会)

「地域振興券のおかげで地域の人がたくさん買えるものに来てくれるようになった」と言います。お店を買いもので応援することで、お店もまた

地域行事などに一肌脱いでくれるという循環がいつそう生まれていきます。そしてなにより、買えるものしながらのおしゃべりは、貴重な地域の情報交換の場にもなっています。公民館を中心に、地域のつながりが広がっています。

●道路ボランティア

沖縄市では、建設部道路課の事業として、地域の道路を清掃する住民グループにボランティア活動助成を実施しています。泡瀬第三地区でも、男性を中心とした10人ほどの道路ボランティアが、道路の植え込みの草取りなどで活躍しています。

「男性にこそ参加してほしかった」と仲間さん。定年退職後の夫が家にいる、というお宅に向き、「力を貸してほしい」と頼みます。「そこまで言うなら、としぶしぶ始めた男性が、道路ボランティアにはまってるんですよ」と話します。

当初は月1回の活動を想定していた道路ボランティアですが、活動を始めた男性たちは、「植栽のある植樹マス内の草取りだけでなく、花を植えたい」「花を植えるための穴を



造花や置きものがある、遊び心いっぱいの植え込み



公民館の草花に水やりをする笑顔をパチリ
(写真提供：泡瀬第三自治会)

掘ろう」と大活躍。月1回ではもの足りない、現在は毎週土曜日の午前中に活動をしています。

花を植えていくと、今度はその花に水をまかなければなりません。ですが、地区内の植樹マスに植えた花

への毎日の水やりは、道路ボランティアだけでまかなうことは難しい。「気がついたら、道路ボランティアの男性たちが、近所の人に声をかけてほしい、水をまくために水

道路ボランティアと水まき隊



あるとき、歩いていた仲真さんは、「あれ、なんだろう?」と植樹マスを覗き込みます。「こんな花、咲いていたかしら?」。近寄ってみると、それは造花。花が少ない時期に、少しでも地域が明るくなるようにと誰かが造花を咲かせたのだと言います。ほかに、マスコットや石こうでつくった手づくりの鯛などが置かれている場所があり、「楽しくて笑っちゃうわよね」と言います。地域が明るくなるような、誰かのちよつとした遊び心と心遣い。楽しさの輪が広がっています。

泡瀬第三自治会を担当エリアとする、沖縄市地域包括支援センター東部北で第2層生活支援コーディネーターを務める中田有彦さんは、「私の担当エリアの自治会は、どこも『めげない』地域ですね。皆さんそういう傾向にある感じです。自治会長さんが熱心なのは、自分たちが住んでいるところ、自分たちの地域が好きだからだと思います」と話します。さらに、「泡瀬第三地区は、会長が『楽しいことをやっていけば、自治会も地域も活動的になるから、自分が率先してやっていく』と話されています。自分も楽しいし、自分が楽しいことをやったらみんなも楽しくなる

自治会では、月1回、市社協、担当地域包括支援センターと福祉連絡会を開催、地域の情報交換をしています。「楽しいことも気になることも共有します。得るものが多いたいせつな時間」と仲真さんは話します。そして、「私たちに何ができるかな? とこの場でもいつも、アンテナを立てているんですよ」と言います。

自治会長は「地域のインフルエンサー」



第2層生活支援コーディネーター
中田有彦さん

という思いのもとに、いろいろな活動に取り組みられています。ただ、『地域のため』と言いますが、会長も地区の皆さんも、とても楽しそうですね。会長は、いろいろな人に関わってもらったときも、楽しい巻き込み方を伝えていて、みんなが受け入れやすいような話をされて、住民にも受け入れやすいシステムづくりを進めていると感じます。人に情熱を持たせるのが上手な方なんです」とも。

泡瀬第三地区は坂が少なく、買い物ものにも歩いて行ける利便性に恵まれた地域でもあるため、「普段から、歩いている人をよく見かけます」と中田さん。公民館で行事があるときも、「大きな駐車場はあるものの、歩いて公民館まで来る人が多い」ということに気づきを持っています。

担当地域のなかで泡瀬第三地区は高齢化がもっとも高い地域ではありますが、介護認定率はずっとも低く、こうした日常の行動が健康づくりに一役を買っていることも推察されます。

さらに、自治会活動で大きな力を発揮する婦人会の連絡に、グループLINEを導入。最初は「できない」と言っていた人も、使っているうちにできるようになったというエピソードを聞いた中田さん。「婦人会内の連絡でやり方を覚えて、遠くに住む家族ともやりとりができるようになった」という話も聞いています。

コロナ禍で離れて住む家族とは会いづらい日が続いていますが、新しいつながり方をそれぞれができるようになっていく、これも自治会の力ですよね」と言います。「自治会長さんは、地域に大きな影響を与えるインフルエンサーのようなもの」と笑います。

沖繩市の考える これからの地域づくり

沖繩市では、2021年12月16日に「高齢者サロン交流会 地域のお宝発表会」を開催し、3か所の高



左から、長嶺みどりさん、又吉佳菜さん、黛生世さん、高江洲純子さん
(沖繩市健康福祉部介護保険課地域支援担当)

齢者サロンの発表会を実施しました。実践者と担当する第2層生活支援コーディネーターが発表したサロンの実践からは、定期的で開催されているサロンのたいせつさはもちろん、それにとどまらない日常のつながりや気にかかけ合いの様子が報告されました。

沖繩市健康福祉部介護保険課地域支援担当主査の長嶺みどりさんは、「沖繩市は、後期高齢化率が9%程度でまだそれほど高くありませんが、高齢者が元気で活躍していく土壌をつくっていく準備期間ととらえています。生活支援体制整備事業をきっかけに、私たちも地域の関係者

と一緒にそうした地域づくりを目指して取り組んでいるところですよ」と話します。ですが、進めてきた矢先に訪れた新型コロナウイルス。「地域の方々の意識が高まり、取り組みが進んできたという実感を得たときにコロナが来て、いろいろなことがストップしてしまいました。正直なところ、モチベーションが下がってしまったのではないかと心配だったんですが、実は地域の皆さんも危機意識を感じていて、地域活動をやりたいという気持ちを持ちながら待っていたことも同時にわかったんです。コロナがあつたから、そうした住民の機運の高まりを強く感じたとも言えます」と長嶺さん。

もともと、「沖繩県全体としてデイサービスの利用率がとて高く、介護保険制度が始まってから、ちよつと足腰が悪くなったらデイサービスにつながって、デイサービスにつながつたらそこが居場所になって卒業が難しくなってしまうという課題がありました。地域の通いの場がないというのが沖繩市の課題だったのですが、いまは通いの場が少しずつ増えて、高齢者の方に地域で過



サロン交流会では参加者同士の意見交換も

る場所をお伝えすることができるようになってきました。地域づくりがこれからますます進めば、その効果は大きく出るだろうなと思っていま

す」と長嶺さんは話します。

同課の保健師の又吉佳菜さんは、「コロナ流行前までは、介護予防の観点から週1回、月1回など定期的に参加できるサロンづくりを推進してきました。第2層生活支援コー

ディネーターや地域住民のご協力もあって、活動が広がりつつありましたが、コロナの影響で多くの活動が休止される事象となりました。これまで元気に活動に参加されていた方の体力低下や生活への不安の声があり、改めてサロン活動の意義や、活

動以外の日頃の支え合いの大切さを実感できました。第2層生活支援コーディネーターともそのたいせつさを共有しながら、コロナ禍でも変わらず続くつながり（地域のお宝）を発見し、見える化し、地域の方々や専門職にその価値を意識づけて行こうという思いを持ってともに取り組んでいます」と話します。「活動をつくるのではなく、いまあるつながりを発見し、意味づけをしていく。それを見える化してみんなで共有することで、住民さんの意識が変わってきて、自主的な活動が生まれてくる。それは時間をかけてできていくものだ、ということがよく腑に落ちて、動きやすくなったのだと思います。そういう地域のつながりにしつかり目を向けて、そういうことが地域のお宝で、健康を保つ活動だということ発信することが必要で、第2層生活支援コーディネーターと一緒に取り組んでいきたいと思っ

ています」と長嶺さん。ただ、コロナ禍の不安で、高齢者の転倒や骨折が増えていることも指摘します。「介護保険事業対象者のチェックリストを見ると、多くの人が転倒

や骨折にチェックがありました。外出が減り、体力や筋力の低下が数字にも表れています。地域活動に積極的に参加する人は自主的に出かけていかれますが、そうではない人たちのことも地域の皆さんが気づいて声をかけたときに、そこで気になったことをどこに知らせたらいいのか、どこで共有し、どうすればいいのかを考えたらいいかということもあわせて伝えていかなければならないと思っ

ワクワクをつなげ、 広げる地域づくり

泡瀬第三地区では、ちよつと気になる人がいたときには、その人の経歴や趣味を聞き、得意なことを地域活動と結びつけています。たとえば、昔、肉屋で働いていたという男性は、バーベキューのときに肉を焼いてもらい、みんなで舌鼓を打ったりしています。

さらに、あるとき、地域の住民が業者による生活支援サービスを利用していただけとわかりました。ワンコインでちよつとした困りごとを解決してくれるサービスは手軽で魅力的で

すが、仲眞さんは「危機感を覚えた」と振り返ります。「相談してくれれば、地区の誰かがその人の力になれるのに。もつともつとコミュニケーションをとって、絆を深めていかなければと感じた」と話します。

家族や身近な人が閉じこもりがちだと聞くと、「公民館に来たら、楽しいことがたくさんあるよ。一度一緒に来てみてよ」と声をかけます。1回来たら、「明日はこんな楽しいことがあるよ。別の日はこんなこともやってみよう」と誘います。「来たら楽しいから、また次も来ようつもりですよ」。

再びの感染拡大で、公民館で「集まる」活動が止まっても、「そのときはまた、ラジオ体操かな。やってみて、これが大事だとわかっているから、それをまたするだけのことよ」と仲眞さんは明るく話します。

気になる人はほうっておかない。その人の得意なことを地域活動とつなげて、地域に「あなたじゃなければ」という出番をつくっていく。その人のワクワクと、地域のワクワクをつなげ、広げる地域づくりが進められています。

事務局からのお知らせ

オンライン講座のご案内

本誌掲載の沖縄県沖縄市・泡瀬第三自治会の取り組みを学ぶ、オンライン講座を開催します。
泡瀬流・楽しい地域づくりの極意を体感しましょう。

コロナ禍でもつながりを諦めない ～ワクワクが広がる地域づくり～

日 時：2022年2月21日（月）11：00～12：00

開催方法：オンライン（Zoom）

参加費：無料

ゲスト：泡瀬第三自治会 自治会長 仲眞 紀子さん

コメンテーター：（一社）釧路社会的企業創造協議会 代表理事 櫛部 武俊さん
（「つながりを切らない」情報・交流ネットワーク 呼びかけ人）

コーディネーター：元 宝塚市社会福祉協議会 佐藤 寿一さん
（「つながりを切らない」情報・交流ネットワーク 共同代表）

お申し込み方法：ホームページよりお申し込みください。<https://www.tunagari-pj.net/case>

アーカイブのご案内：本情報誌のバックナンバーやオンライン講座のアーカイブ映像は、ホームページ（<https://www.tunagari-pj.net/case>）でご覧になれます。

つながりPJ事業のご案内

「コロナ下の地域づくりをざっくばらんに考えよう！座談会」

地域共生社会の包括的な支援体制の構築に向けて、地域活動実践者や社会福祉協議会職員等がざっくばらんに考えや思いを語る座談会を開催します。

○孤立を防ぐ！地域共生社会への包括的支援を考えよう

○包括的相談⇔参加支援⇔地域づくり支援の関係性

○鍵となる「参加支援」の本質とは

日 時：第1回目 2022年2月4日（金）14：00～15：30

メンバー：櫛部 武俊（釧路社会的企業創造協議会 代表理事）
森田 真希（NPO 法人地域の寄り合い所また明日 代表）
山本 信也（宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部長）

進 行：風 保憲（淡路市社会福祉協議会 事務局長）

第2回目 2022年2月24日（木）10：30～12：00

メンバー：塚本 秀一（社会福祉法人湘南学園 専務理事）
池谷 啓介（NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長）
上村加代子（NPO 法人にしはらたんぼぼハウス 副理事長）

進 行：佐藤 寿一（元宝塚市社会福祉協議会 常務理事）

対 象：包括的支援体制構築に取り組む支援団体・自治体等

参加費：無料（※要事前申込・入退室自由）

発行元：孤立させない地域づくりのためのつながり推進プロジェクト

<https://www.tunagari-pj.net/>

事務局：特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F

TEL:022-727-8730 FAX:022-727-8737

URL:<https://www.clc-japan.com>

本情報誌は、厚生労働省 令和3年度新型コロナウイルス感染症セーフティネット強化交付金の助成を受けて作成しています。

「畑仕事が介護予防」 産直で人も町も元気に

越知町中大平地区



月曜日の出荷作業
「集まってわいわいするのが楽しみ」



「おち駅」の陳列棚に並ぶ
中大平地区の野菜



中大平地区

越知町中大平地区は、およそ20世帯50人ほどが暮らす山間集落。高齢化率は6割を超えている(2017年3月末時点)。

月曜日の朝9時。道路に面した車庫に70~80歳代の男女十数人が野菜や果物、編みかごなどの工艺品を持って集まる。産直活動に参加している住民たちだ。野菜などは、町の観光物産館「おち駅」に出荷するもの。

集落支援員が軽バンでやって来ると、出荷者と品目を確認し、値札を発行。住民たちは値札の貼り付けを行う。30分ほどで作業を終えると、支援員が野菜などをバンに積み込み、「おち駅」へと向かう。

この産直活動は17年4月に始まった。「おち駅」で販売する地場産品を十分確保できず、困った町の関係者が、自家用の畑作に熱心な中大平の高齢者に余剰作物の提供を呼びかけたのがきっかけ。登録メンバーは現在8人だが、その妻や夫も加わり、実際は14~15人になっている。

活動の世話役でメンバーの一人、古味^{こみ}文子さん(76歳)は、「初めは誰も乗り気ではなかった。自家用の野菜が売れるか不安で…」と振り返る。ふたを開ければ売

れ行きは絶好調。不安は自信に変わった。「頼まれて嫌々出荷していた人も、すぐやる気満々になった。月曜日に集まってわいわい出荷作業をするのも楽しみ。皆とても喜んでいる」。

年金以外の収入も得られるようになった。「少額でも自分で稼げるのはうれしい。ほしいものを買ったり、孫に小遣いをあげたりできる。気持ち前向きになる」。月収は多い人で3万円に上る。

役場の産業課や企画課の担当らとともに産直を働きかけた町地域包括支援センターの保健師、矢野雄二さんは、「畑仕事は最高の介護予防」と明言。さらに「畑を『生きがいデイサービス』にすればいい。産直をやればお金も稼げて、町の産業振興にも貢献できる」とも。

メンバーたちは、出荷日以外もひんぱんに顔を合わせる。「畑に出れば誰かに会う。おしゃべりに夢中になって、ちっとも働かずにお昼になってしまうことも」(古味さん)。お互いの様子をよく把握し、異変があればすぐ気づく。畑は見守りの場でもある。

高齢になっても畑仕事を続ける生活文化は、地域包括ケアの推進に役立つ貴重な地域資源と言える。

出典:「生活支援体制整備事業をすすめるために」(高知県 2018.3)

組織横断で連携次々
住民活動立ち上げ支援で

越知町役場



産直活動の支援に関わった人たち(左から集落支援員の西森俊博さん、町企画課係長・岡田浩和さん、地域おこし協力隊員の大石晃裕さん、町地域包括支援センターの保健師・近藤沙綾さんと矢野雄二さん、町産業課の藤原民雄さん、同課課長補佐・太田一実さん) [浅尾沈下橋にて]

山腹の斜面に寄り添うように家々が並び、越知町中大平地区。約20世帯50人ほどが暮らし、高齢化率は6割を超える。ここで2017年4月、町の観光物産館「おち駅」に野菜などを出荷する、高齢者主体の産直活動がスタートした。

実は、活動の立ち上げに際し、町の産業課(農業関係)、企画課(集落支援関係)、住民課(地域包括支援センター)が連携して支援に当たっている。

そもそもの発端は、「おち駅」で販売する地場産品が、ふるさと納税の返礼品として人気を博し、品不足に陥ったこと。相談を受けた産業課の担当は、自家用の畑作に熱心な高齢者から野菜などを提供してもらえば、商品の確保に加え、生きがいづくりにもなると思いつく。このアイデアを地域包括支援センターの保健師に伝えた。

暮らしに根ざす介護予防を考えていた保健師は、産直活動の立ち上げ支援を決意。畑仕事が高齢者の生活習慣として根つき、住民関係も良好な中大平地区に狙いを定めた。しかし、「おち駅」への出品手続きや集出荷、商品棚への陳列、価格設定、売り上げ管理などは、地区の高齢者だけでは無理と判断。集落支援員がサポートに入れないか、企画課に相談を持ちかけた。

当時、集落支援の具体策を模索していた企画課の担当と集落支援員は、産直支援の実施を決定。その後、デザインスキルのある地域おこし協力隊員も巻き込んで「中大平・急斜面の元気野菜」のロゴマークを制作するなど、ブランド化も進めている。

住民への働きかけは、まず保健師が、中大平地区で長年民生委員・児童委員を務めている地区のキーパーソンに打診。賛同を得て地区への根回しをしてもらい、そのうえで集会所での説明会開催にこぎ着けた。説明会には各課の担当も同席し、「おち駅」の経営と町の産業振興に中大平地区の協力が欠かせないと訴えた。

住民からは不安視する意見も出たが、「まずは一度やってみよう」ということに。結果は大成功。

役場の担当らは現在、「たまに様子を見に行くに留め、問題が生じれば積極的に関与する」(保健師)姿勢で臨む。関与が強いと住民の主体性が崩れ、関係を切れれば活動の危機にすぐ手を打てない。「当面つかず離れず見守る」(同)ことにした。

この一連の動きからは、住民活動支援のあり方をはじめ、介護予防の考え方、地域おこしや集落支援と高齢者の生活支援の関連など、多くを学ぶことができる。